

「最後の食事」がもたらしたもの

特別養護老人ホーム 第二遠州の園

ユニットリーダー 小杉 淳

その人らしく、自由に生きること・・・

- 平成21年8月に入所され、半年で看取りを迎え、わずか1日で永眠された方の事例発表です。KWさん、85歳、男性、既往歴糖尿病、胃癌により胃を摘出、独歩だが歩行は不安定、腸閉塞により入院されており、退院後、そのまま第二遠州の園に入所となる、性格はとても明るく人と話す事が大好き、頑固で常に何かを口に入れていないと気がすまない、なんでも自分でやりたい、などたくさんの特病や課題を抱えていました。施設と家族で何度も話し合い、ケア方針は「その人らしく過ごしてもらおう」としました。

KWさん 入所～退園まで

平成 21年 8月10日	独歩にて入所される
8月13日	転倒により骨盤を骨折
9月 1日	退院
9月 9日	顎骨が外れてしまう
11月28日	転倒により大腿骨を骨折
12月15日	退院、顎が外れていた
12月19日	食事量、ADLの低下
12月23日	栄養補助食品開始
平成 22年 1月21日	看取り開始
1月22日	退園

①『看取りの食事とは？』

- 大好きな**メロンパン**
- 「おいしい」と言ってもらえた!!



まとめ

- 本来、食事の目的は栄養摂取です、では看取りにおける食事の目的はなんのでしょうか？私は『舌に残る思い出の味』を食べる事だと思います。自身(ご本人)が娘に教えた手料理、ふかしただけのサツマイモ、など人それぞれの味です。KWさんにとっては『ヤマザキのダブルメロン』が思い出の味だったのです。KWさんが、どのように満足されたのか分かりませんが、口を潤す程度だったメロンパンとお酒が、本人家族にとっても意味のあるものになったと私は思っています。

②家族が看取れる環境作り

- 家族は受け入れることが出来ない
- 『もう食べれないんですね』
- 家族が出来ること

まとめ

- 看取りにおいて家族は「もう何もしてあげれない、何ができるのか分からない」など、諦めてしまう事が多いのではないのでしょうか？後日、家族より「私自身も父を看取ることができた気がします。本当にありがとうございました」とのお言葉を頂きました。今回の事例では、職員が積極的に食事介助や体位交換など、家族と一緒にを行いました。結果として家族が看取れる環境が作られたと思います。本人と家族の時間もとても大事ですが、『家族が看取れる環境作り』こそが、突然の看取りに困惑している家族が最も必要としている事だと思います。

○今後の課題